

ユニバーサル社会への扉(1)

「日常生活に困らない程度」の言語は簡単？

上席主任研究員 水野 映子

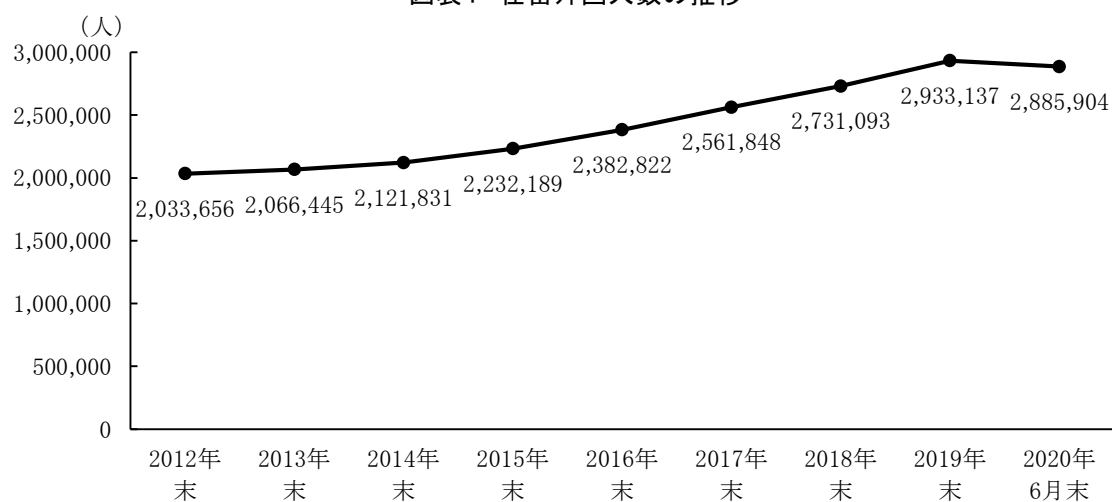
＜日本人が在住外国人に望む日本語力＞

日本に住む外国人（在留外国人）は近年増加し続けており、2019年末には300万人に迫っていた（図表1）。新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、その数は2020年6月末には減少に転じたが、感染拡大が収束すれば、いずれまた増えることも予想される。

日本人と外国人がともに暮らす上では、何らかの言語でコミュニケーションをおこなう必要性が当然生じるが、外国人の日本語のレベルに対して日本人はどう考えているのだろうか。文化庁が先ごろ発表した「令和元年度 国語に関する世論調査」では、日本に住む外国人が日本語の会話や読み書きがどの程度できるとよいと思うかについて質問した項目がある。それによると、会話に関しては「日常生活に困らない程度」と答えた人の割合が68.3%と圧倒的に高かった（図表2）。これに続く「簡単な挨拶ができる程度」「仕事や学校生活が円滑に行える程度」を求める人は、それぞれ1割台に過ぎない。一方、読み書きに関して「日常生活に困らない程度」と答えた人は、会話に関してそう答えた人に比べると少ないものの、それでも54.8%と過半数を占めており、「平仮名・片仮名の読み書きができる程度」（20.9%）や「仕事や学校生活が円滑に行える程度」（10.4%）を引き離している。

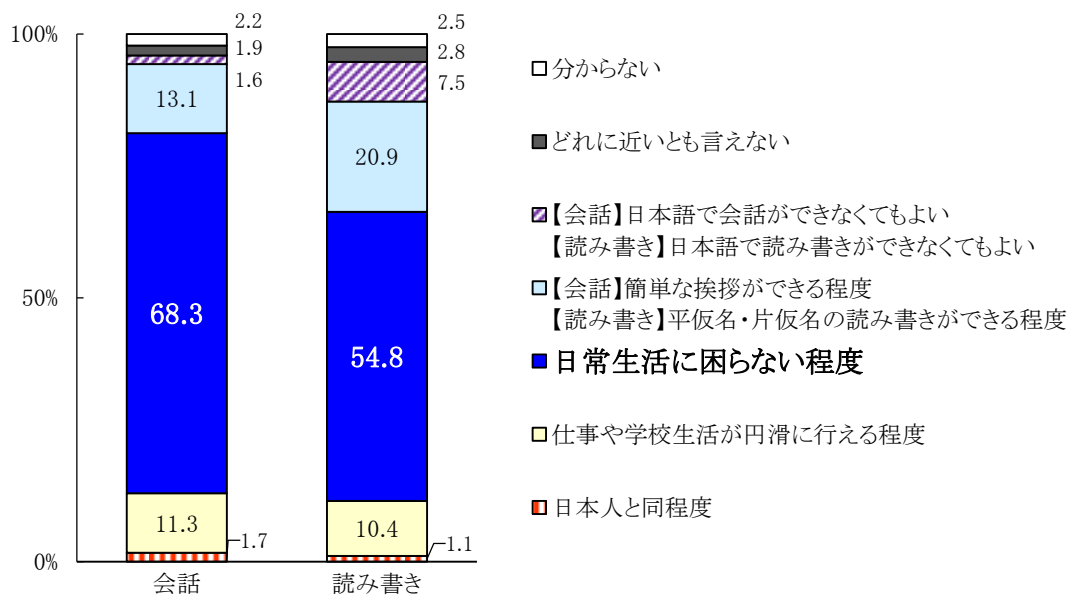
多くの日本人は、日本に住む外国人に対して「日常生活に困らない程度」の日本語の会話・読み書きができることを望んでいるといえる。

図表1 在留外国人数の推移



資料：法務省「令和2年6月末現在における在留外国人人数について」2020年10月

図表2 日本在住の外国人は、日本語の会話・読み書きがどの程度できるとよいと思うか



注1：調査時期は2020年2月27日～3月15日、調査対象は全国16歳以上の男女個人3,000人、有効回収数(率)は1,994人(56.1%)

注2：【会話】は会話についての質問、【読み書き】は読み書きについての質問、無印は両者についての質問

資料：文化庁『令和元年度 国語に関する世論調査 漢字・言葉遣い・外国人と日本語』ぎょうせい、2020年10月

<「すぐ」っていつ? ～日常生活の言語の難しさ～>

この「日常生活に困らない程度」という表現は、日本語に限らず言語の習得レベルを示す際によく用いられる。一般には、仕事や学校生活などで使われる専門的な言葉よりも、日常生活で使われる言葉のほうが簡単だという前提があるようだが、本当にそうだろうか。

スペイン語を公用語とするウルグアイに住んでいた自分自身の経験(文末参照)を振り返ると、日常生活で交わされる会話やスマートフォンでのショートメッセージのやり取りには常に悩まされていた。くだけた話し言葉や書き言葉には、俗的な表現、地域特有の単語や発音、教科書通りでない文法や綴りなどが多く含まれており、スペイン語力が十分でない自分には難解だったからである。また、話題が次々と展開される雑談にもなかなかついていけなかった。

それに比べると、専門分野の整然とした会話・文章や議題に沿った会議、定型的な文書・メールのほうが、まだわかりやすいと思うこともあった。また自分の語彙も、専門的な用語より日常生活で使う用語のほうが乏しかった。例えば、障害に関する分野では頻出の「難聴 hipoacusia」という小難しい単語はすぐに覚えたが、「耳 oreja」という初歩的な単語は長い間知らなかった。

加えて言えば、文化や習慣を理解していないと、日常生活の言葉の理解にも困難が生じる。自分自身がウルグアイで最も戸惑ったことの一つは、日本との時間の感覚の違いと、それに関連する言葉のニュアンスの違いだ。何かを「すぐやる」と言われて

から何時間・何日も待たされたり、予定が延期・キャンセルされたりすることは、それこそ日常茶飯事であった。ウルグアイにおけるスペイン語の「すぐ pronto」「予定・計画 plan」と、日本語の「すぐ」「予定・計画」はニュアンスが異なることを次第に悟ったものの、ついいら立ってしまうこともあった。2年間暮らしても、この種の文化・習慣の違いにはしばしば驚かされ、ときにはそこから生じるコミュニケーションのずれをも感じた。

日本に暮らす外国人の中にも同じような経験をしている人がいるとすると、「日常生活に困らない程度」の日本語が必ずしも簡単でないことは想像できる。日本人が外国人に接する際には、日常生活のコミュニケーションを軽くとらえず、相手の状況に応じてわかりやすい日本語を使うよう心がけることや、日本語の背景にある日本の文化・習慣と相手の文化・習慣の違いにも思いを及ぼせることが大切だろう。

* * *

筆者はこれまで、障害の有無・年齢・言語・国籍などにかかわらず皆が暮らしやすいユニバーサル社会^{*1}の実現を目指し、バリアフリー、ユニバーサルデザインと呼ばれる分野の調査研究などに携わってきた。また、2018年1月～2020年1月の2年間は、日本とは言語・文化が異なる南米ウルグアイに身を置きながら、アクセシブル・ツーリズム（誰もが楽しめる観光、ユニバーサル・ツーリズムともいう）を推進するボランティア活動に従事していた^{*2}。この「ユニバーサル社会への扉」シリーズでは、筆者の経験も交えながら、コミュニケーションや観光などさまざまな角度から、ユニバーサル社会について考える。

(ライフデザイン研究部 みずの えいこ)

【注釈】

- *1 参考までに、2018年12月に制定された「ユニバーサル社会実現推進法」において「ユニバーサル社会」とは、「障害の有無、年齢等にかかわらず、国民一人一人が、社会の対等な構成員として、その尊厳が重んぜられるとともに、社会のあらゆる分野における活動に参画する機会の確保を通じてその能力を十分に発揮し、もって国民一人一人が相互に人格と個性を尊重しつつ支え合いながら共生する社会」と定義されている。
- *2 ウルグアイ滞在中および日本への帰国直後に執筆した「ウルグアイ通信(1)～(5)」は、当研究所ウェブサイトのレポート紹介ページ(<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/members/mizuno.html>)に掲載されている。ボランティア活動やウルグアイの概要については、特に初回（以下）を参照。
「ウルグアイ通信(1)『遠くて遠い』国にやって来て」2018年5月
<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2018/wt1805b.pdf>